



Title	室町水墨画と五山文学：十五世紀後半における周文派と禅林の詩画軸制作システム
Author(s)	福島, 真理子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49419">https://hdl.handle.net/11094/49419</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ふくしま じょういち まりこ
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 22629 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	室町水墨画と五山文学－十五世紀後半における周文派と禅林の詩画軸制作システム－
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 藤岡 穣 (副査) 教 授 橋爪 節也 教 授 天野 文雄 京都国立博物館美術室長 山本 英男

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、室町時代中期の画僧として名高い周文の弟子岳翁の作品を中心に、15世紀後半における室町水墨画について、五山文学との関わりから多角的に論じたものである。

第 1 部は、岳翁に関する 3 章からなる。第 1 章では、史料によって知られる岳翁の伝歴を確認したうえで、「岳翁」印の検討をもとに岳翁画の編年を試み、山水図を中心にその画風展開を 4 期に分けて整理するとともに、了庵桂悟をはじめとする着賛者の印を検討することによってさらに岳翁画の編年を跡づけている。また、岳翁画の贊文や史料から、岳翁が手がけた詩画軸については了庵桂悟がその制作のエージェント的な役割を果たしていたことを明らかにし、当時における詩画軸の制作システムの一端をしめした。第 2 章では、岳翁画に記された全贊文の解釈を試み、それを画題や絵画表現に照射することで、詩画軸における画と詩との協奏を読み解き、あるいは詩画軸制作にあたっての岳翁と着賛者、すなわち画僧と禅僧との交流の実態を浮き彫りにしている。第 3 章では、岳翁と、同じく周文の後継者と目された雪舟との、とりわけ両者の初期作品における共通項を抽出することにより、確かな真作が知られない周文画の復元可能性を探るとともに、互いに異なる歩み

をみせる岳翁と雪舟のその後の作画にも周文様式が継承されていることに言及する。また、禅林においては、すでに周文以来、絵画が単なる社交の道具としてではなく、思索のてがかりとして受容されており、それゆえに周文を師とする「画の法脈」が重視されていたことが、周文派形成の背景にあったことを指摘する。

第2部は、岳翁を離れ、より広い視野から室町水墨画を考察する。第1章では、宝徳2年（1450）に制作された、当時の名だたる30名の禅僧が詩文を寄せる伝周文筆「沙鷗図」をとりあげ、その制作システムに禅林のヒエラルヒーと政治的意図が反映していること、また、それぞれの詩における鷗のイメージや意味に、古典ないしは禅僧たちが詩文学習の手引きとした抄物からの引用がみられることを指摘し、詩画軸制作の地平を明らかにする。続いて第2章では、主として14～16世紀の絵画作品や記録上の画題、さらには詩文の中に「煎茶」のモチーフを涉獵し、本来は禅の修養と関わるモチーフであった「煎茶」が、次第に文人趣味を表象する記号として扱われるようになる歴史を概観する。

以上、本論は、室町時代中期、15世紀後半の詩画軸の絵画と贊とを併せ読み解くことを通じて、五山の禅僧たちと深く関わるその制作システムを明らかにし、またその時期における周文派の画僧たちの作画の有り様について省察したものである。

#### 論文審査の結果の要旨

室町時代中期、画僧如拙、周文の時代に、画幅上に禅僧が漢詩文を認める「詩画軸」という芸術形式が隆盛を迎えた。本論文は、こうした詩画軸について、比較的多くの作例が遺る、周文の弟子岳翁の作品を検討することによって、その制作システムを明らかにするとともに、確かな真作が知られない周文の絵画制作を逆照射することを目論んだものである。2部構成からなる本文は400字詰原稿用紙に換算して約350頁、これに本文に対応する資料編および図版編が付されている。

上記の目論見にしたがい、第1部ではまず、岳翁作品の編年、その画贊の解釈という基礎的研究を行っている。編年に関しては、新たに「岳翁」印と着贊者の印を検討することにより、従来の研究よりはるかに精度を増し、また、従来の見解に一部修正を求めることがとなった。そのうえでなされた岳翁の画風展開に関する考察は、同時期の水墨画の展開に一指標を提示するものと言えよう。一方、丹念な画贊解釈は、それを絵画表現や画題に照射することで岳翁の詩画軸において画と詩が響き合うさまを鮮やかに描出するだけでなく、岳翁の詩画軸制作が了庵桂悟という東福寺の禅僧によってプロモートされていたことを明らかにした。岳翁の詩画軸に了庵が多く着贊している事実は知られていたが、その他の着贊者の背景を探ると、東福寺の外護者である大内氏や伊勢北畠氏、あるいは五山禅僧など、そのネットワークは了庵のそれに重なることが知られたのである。第1部では以上に加え、岳翁作品について、岳翁と同じく周文の後継者を名乗った雪舟の作品との比較を行った。その結果、とりわけ岳翁の初期作品とそれと同時代の雪舟作品に顕著な類似が認められることが指摘し、そしてその年代が周文最晩年にあたることから、両者の共通項が周文作品に由来する可能性を説く。周文は岳翁、雪舟や墨渓らの師であり、室町水墨画壇の祖とされるが、真筆作品がないなか、その画風の探求は常に室町水墨画研究における重要な課題とされてきた。本論文においてその姿を具体的に浮かび上がらせた功績は高く評価できる。岳翁研究としての第1部に対し、第2部では、伝周文筆「沙鷗図」をとりあげ、その着贊の検討を通してすでに周文の時代にも岳翁作品と同様の詩画軸制作システムが機能していたことを指摘する。また、禅林において嗜好された煎茶に注目し、絵画作品のなかでの煎

茶という画題やモチーフの意味について考察をめぐらしているが、これは附論的な内容である。

本論文は以上のように、岳翁研究の水準を飛躍的に高め、周文の次世代の画家としては雪舟の蔭に隠れがちであった岳翁の存在の重要性を改めて認識させるものである。また、詩画軸が単に文人としての禅僧の交流の道具ではなく、禅林のネットワークやヒエラルヒーを反映しつつ、政策的にプロモートされていたことを明らかにし、詩画軸研究に新たな視点をもたらした。ただし、新たに岳翁作品の印章の検討を行いながら、画風展開の考察では結果として先行研究に追随してしまった嫌いがあり、画風展開の契機についてもより深く考察することが望まれた。また、「室町水墨画と五山文学」とのテーマは、岳翁研究から発展し、より広範な研究を企図していたものであろうが、そこまで到達できたとは言えない。贊文の解釈にも更なる精度を求めるべきと思う。こうした課題を残したとはいえ、本論文がこれからの室町水墨画研究に裨益するところは上述のとおりきわめて大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。